

慶應義塾図書館史

第一章 ズーフ部屋の流れ

一 鉄砲洲時代

慶應義塾図書館史はまだ纏ったものはないが、現在の図書館が出来たときに祝詞やら演説やらで回顧しているものがいくつもある。それによると時の塾長鎌田栄吉は明治二十三年慶應義塾が大学部を開設したとき、今迄の蔵書に加えて、新たに文学、法律、政治経済の書籍を外国に求めて基礎を定めた、これは明治四十二年十一月二十三日の建物の安礎式の式辞として述べている。これは大学図書館としての起源であろう。式辞にもあるように、是迄の図書に加えてとある図書は、では図書館の蔵書とはいえないのか。明治二十三年、小泉信吉を迎えて新塾長とし、文学・理財、法律の三科を設けて私立最初の大学として発足した以前の慶應義塾は、安政四年福沢諭吉が私塾を創設して以来、洋学中心の学校であった。そしてその洋学塾には図書館室は欠かせないものであった。明治四十五年五月一日新図書館の開館式当日、福沢諭吉の長男一太郎は亡父の回想をして緒方塾のズーフ部屋のことを語っている。「私の父が能

く生前に話したことがある。父がずつと古い時分には緒方先生の塾に書生をして居った。其時の有様は蘭書の印刷したものは余りない。偶々其印刷した本が一冊あればそれを皆んなで引写しをして、それを会読の時に使って居ると云うことであつた。それからなおズーフという字引が緒方の塾に一つしかない。それで皆んなズーフのある部屋に行つて其字引の周囲に集つて首つびきで字引を見て勉強する。その部屋のことをズーフ部屋といったそうで、それは自伝にも出て居りますが、其時の父が今なお若しも存生であつて、此図書館を見たならば、大なる相違であると思つて驚くことであろう。」と述べ、次で新銭座から三田への変遷を語っている。大学図書館という字に拘泥するならば鎌田塾長のいう明治二十三年を創始とせねばならないが、慶應義塾の歴史からいえば創立当初からの図書室を考えなければならぬ。

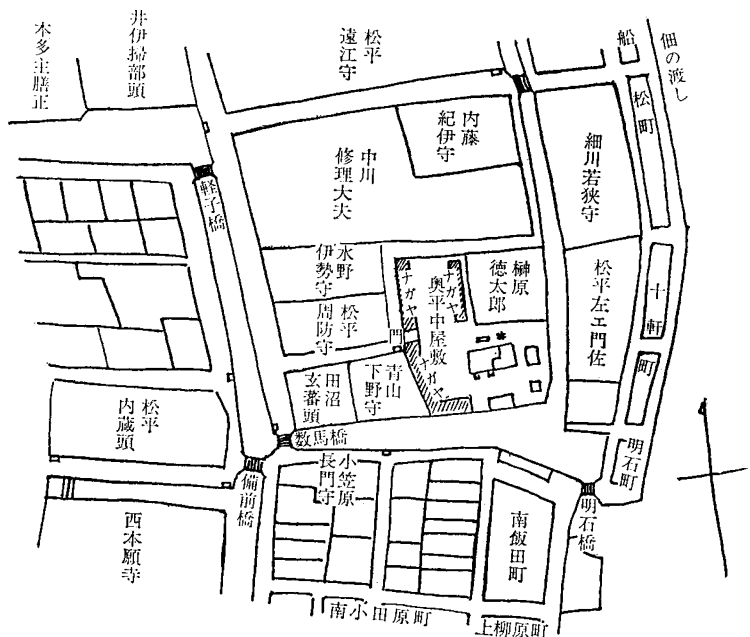
緒方塾のズーフ部屋の有様については、福沢諭吉や長与専斎らが詳しく語っている。それ程、蘭学塾には必要かくべからざる部屋であつた。何故ならズーフという字書は自伝にもいわれているように、蘭学社会唯一の宝書とあがめられてゐるものであり、誰しもが持てるものではなかつた。江戸幕府の開成所などには数部も取揃えてあつたことであろうが、民間人ではその名も高い緒方洪庵でさえ、一部しか持てない。学生各々が持てる道理がない高価なものであつたから、この部屋の存在は蘭学塾のそれこそ心臓の部屋であつたといえる。

さて安政五年十月、福沢は江戸へ出て、鉄砲洲の奥平中屋敷の中で蘭学を教えた。そこにはズーフが備えられていたであらうか。ズーフの字書も安政四年に幕府の奥医桂川甫周の翻刻するところとなつた。桂川版は全十六冊、積んで高さ二尺に余る大部のものである。従つて以前の写本時代に比べれば安価であつたろうが、まだ貧乏であつた福沢

塾に備えられたかどうか、おぼつかない。創始の頃の福沢塾は「慶應義塾百年史」によれば、藩の紐つきの学校であったという。その典拠を福沢自身が書いた明治十六年版「慶應義塾紀事」に「僅かに一小家塾」と記したことに基いている。編者は家塾を江戸時代の通念にしたがうと、私塾と藩学との中間に位し、「家塾」は幕藩に仕えている学者が、幕藩の意をうけて自宅に設けた塾であると説明している。若し藩命により藩の保護が多少なりと得られたならば、当然そこには蘭学塾必須のゾーフは備えられていたことであろうが、しかし当初の福沢塾の様子は誠に見すばらしい。安政六年入門して、後に陸軍軍医総監となった足立寛の懷旧談によると「私が十八の年に福沢先生が其前年大阪の緒方塾より江戸に出て参られたという評判を聞いて、鉄砲洲の住宅に先生を訪いました。先生は私よりも八つ年長でありますから二十六の年かと思えます。奥平の長屋で一軒の空屋を借りて居りましたが、下は六畳一室で二階には十五畳ばかりの間がありました。（中略）下の六畳の間には畳が三畳敷いてあって、二畳の所に先生が坐って片隅の一畳に私が居りました。それで私が参りました時に「今、飯炊きも居ないから、お前は此処に来て飯でも炊いて書生をしてたらよかろう」と先生がいわれるので、私は飯炊きをしながらか彼の一畳の上で蘭学を研究したのであります」六畳の間に三畳しか畳がなかったという。それは宛然足輕長屋と同様である。藩の保護があったとしたなら、もっと優遇されて然るべきであろう。奥平の中屋敷に塾を持つなどというとかにも好待遇であるように思うかも知れないが、封建時代の空気を吸った者から見ればおかしな話であったと見え、慶應義塾創立五十年祭の式典で、福沢と親交の厚かった大隈重信はその頃を想像して「先刻奥平侯の藩邸などという、鎌田校長のお話であったが、話で聴くと余程立派に聞えるが、な々に勤番長屋である。借家長屋である（拍手）実に貧乏なる状態で、そんな立派なもので

第一章 ズーフ部屋の流れ

ない。諸君が夢にも見ることは出来ぬ。之を見ようとすれば、どこか此辺の貧民窟へ行って見ると直ぐ分る。殆ど貧民窟の状態である。其の時分の状態なんと云うものは――」福沢と足立がいた部屋でさえ、六畳間に三畳しか畳がなかった。岡本周吉や山口良蔵らがとまったという二階に畳があったかどうか疑わしい位である。したがって百年史の「家塾」の解釈はいささか、考えすぎの感がある。第一、福沢の書いた「慶應義塾紀事」は「日本教育史資料」作成のため文部省に差出されたものの付録である。文部省は明治五年、既に家塾を定義した。「唯一家或は二家迄の子弟を教候者は家塾に属し候間、私学之数に算入せず」と私塾よりも



四

鉄砲洲奥平中屋敷とその周辺。中屋敷内の建物配置は塾生小川駒橋の記憶に基づく。安政の開塾当時は斜線の長屋の一隅で、文久以後は建物の白い部分が塾舎であった。原図は文久版江戸切絵図による。

小さいものと言ひ、それに基いて福沢は「私学明細表」を提出した。「教育史資料」のときも、注意書に「家塾寺子屋を開設するものは奉行郡宰里正等の許可を受けしや」などの項があつて、百年史の編者のように当然藩命によるものであるとしたなら、この注意はおかしなものといわざるを得ない。明治初年、文部省は竹橋にあれど、文部卿は三田にありといわれた位の福沢が、文部省の定義を知らず、質問に見当違いの答をするとは考えられない。

こうした塾へ「藩中の子弟が三人五人つつ学びに来るようになり、又他から五、六人も来るものが出来」というが、おそらく極く初歩の者で、和蘭の文典を筈作阮甫が江戸で翻刻したガランマチカやセインタキスを素読したり、講釈するくらいで済んだのであらう。ところが、それから一步進むには原書を持たねばならない。緒方塾には蘭書が十部たらず備付けてあつたというが、福沢はどうであつたらう。福沢が江戸へ出て来たときは公用の勤番であるから、道中ならびに在勤中の家来をひとりくれる定則から、家来一人分の金が渡されるが、その金で家来を雇わず、江戸へ行きたがつていた岡本周吉にあたえたので、荷物は何も無い。僅かにペルの築城書の原書の写しと自身の翻訳原稿を懷中に入れて来ただけである。福沢と岡本が江戸へ来て、汐留の奥平上屋敷の門を叩いて来意をつけると、門番は着のみのままのような風体を怪んだと伝えられている。この福沢が鉄砲洲の勤番長屋をあてがわれて、江戸扶持として六人扶持が本来の十三石の外に下附された。十三石は中津にいる母や姪の生活費で、六人扶持が江戸にいる福沢の給金だとするとなかなか原書は買えない。さきのペルの原書の所持者は家老の奥平屯岐で二十三両で買った。大阪にいたとき洪庵が黒田の殿様から借りて来たワンダーベルトの物理書は八十両という。蘭書の稀覯さ加減といったら、こんなものである。六人扶持で、教授の謝礼や写本の礼金位の収入は多少あつたとしても、蘭書の所持は思いも

よらない。というようなわけで、初期鉄砲洲の塾は原書もなければ、ことさらズーフ部屋と名付けるような場所もない極小私塾であったと想像される。

安政六年開港場になったばかりの横浜へ行つて、蘭語が少しも通用しないことを知って、すぐ英語の学習に志し、通辞森山多吉郎のところへ通つたり、翌万延元年には幕臣木村喜毅の従僕となつて米國へ渡つたり、帰國後は幕府の外国方の翻訳官に雇われたりして、英語の上達に努めたのは福沢らしい機敏な行動であつたが、それも藩の紐つきなどという窮屈さがなかったから出来たことであろう。そして幕臣となつたためか、或は上士の娘を嫁にする必要からか理由は判明しないが、奥平の中屋敷を離れて、芝新錢座に新居を構えた。その家は上下合せて二十畳ほどで、大いさは鉄砲洲の長屋とさして変らなかつたが、庭に松の大樹があり、下女一人を雇えたから、生活は向上していた。この時代も外国方の事務の余暇英語を子弟に教えていたが、部屋の真中にわざびおろしが紐でつるしてある。それは書生が使う度になくなすからという理由で、なお殺風景な微々たる塾であることに変りはなかつた。しかしこの頃の福沢は多少洋書を所蔵していた。

先づ福沢が横浜で蘭語に失望したその日、キニツフルという独乙人が僅かに蘭語を話せた。福沢はその店で薄い蘭英会話書二冊を買つて来た。またその後、横浜へ行く商人から英蘭対訳発音付辞書一部二冊を五両で、藩に嘆願して買つて貰つた。それはジョン・ホルトロップの著せるもので、蘭語から英語へ移る人にとって非常に便利であつたから、其後多くの人に愛用された書物である。英書が目に見えて増加したのは、二度の洋行の後のことであろう。万延元年渡米の際は自費の洋行であつたから、図書を多くは持ち帰れなかつたが、自伝によるとウエブスターの辞書を買

って「其悦は天地無上の宝を得たるが如く」であつたという。このウエブスターは大辞書でなく抄略版であつた由である。この外に「数冊の書を携えて帰国」したと後年回想しているが、その書名はわかつていない。

文久二年条約改訂のための幕府の遣欧使節に随行し得た時は、幕府から四百兩の手当金と繰替拝借金を相当うけて、大いに書籍を買つてこようとの意気込みで出発した。後年の「慶應義塾紀事」によると「文久二年英国開版の物理書、地理書、學術韻府等の書に併せて經濟書一冊を得たり。即ちチャンプル氏教育読本中經濟の一小冊子にして當時は日本國中稀有の珍書なりき」とある。又この時、上海出版の英清辭書を買つて來た。この本は現在も保存されて見ることが出来るが、その上包に「英清辭書二冊千八百六十二年前動にて買う。価五ポンド、火災余甚だ高価なりき」と福沢の筆で記してある。火災の後であるばかりでなく、歐羅巴は物価が高くて出発前の意気込みほど、多くの圖書は持ち帰れなかつたらしい。

しかしこの旅行で英語に自信が持てるようになり、その上、海外の現実を見、振り返って日本を眺めたとき、この儘ではいけないという考えが起るのを押えることが出来なかつた。海外にいたとき既に日本国内の攘夷の噂を聞き、帰国した直後にも公使館の焼討ちや洋学者への暗殺の魔の手がのびているのを知りつつも、福沢は英學普及の必要を確信して、積極的に塾舎の経営にのり出した。安政五年の開塾は藩の上司に呼ばれての教授であつたが、渡欧から歸つての學塾は福沢の發意によるものである。先づ入門帳を作つた。塾舎も辛い、參勤交替制の緩和によつて、奥平藩の藩士の多くが本國中津へ引き上げたため、屋敷は空き屋が多くなつた。福沢はその空屋を借りた。前と同じ鉄砲洲の中屋敷の一隅ではあつたが、この時は勤番長屋でなく「可なりの藩士の在勤せし古き長屋二軒の大小教室を使

用せしものの如く見えたり」(森春吉回想)というし、立田革の懐旧では更らに詳しく「塾は東西に別れ、西は小幡塾頭、東は和田塾頭にて監督し、時々会議を催うされたり。教科書は大概、文典、地理書、窮理書、化学書等なり」と伝えている。

この時代の塾生は緒方塾のそれと同様に一冊の本を手写し、福沢の所蔵せる辞書を引いて勉強したのであるが、それらの蔵書が塾の何処にあったかわからない。ただ次のような記事が福沢の備忘録にある。「恭平取糺候処、卯四月ゾーフ巻冊、中丁岡村屋へ質入、金九両借用の由、福沢の旧書人身窮理は売払い、同断刀は式両にて質入の由」恭平というのは、姓は小幡、文久三年四月入門した古い塾生である。慶應三年福沢が再度の渡米から帰って、自分の蔵書の一部が無いのに気がついた。調べて見ると信頼していた恭平の仕業であったというのである。質入れは恐らく福沢の留守の間に、金の算段をつけるつもりでやったのであろうが、それが失敗したと見える。ゾーフは既述した蘭語辞典、従って英字塾となったこの頃の福沢塾では、もうさして有用なものではなかったのかも知れない。それは兎も角、塾生の容易く手にし得る場所にあったことを知り得る。

この図書部屋を充実させる目的で、慶應三年、幕府の軍艦購入使節の一員となって渡米した。この時は自費の外に仙台藩、和歌山藩からも資金を得ていた。そしてその荷物が「大小数貳拾」の箱詰となって送られて来たが、使節主席小野友五郎とトラブルがあつて差押えられ、それが解除されたのは年も押つまつた十二月となつた。その頃には鉄砲洲は外国人の居留地になることに定まっていたから、急拠立ちのかなければならなかつた。そこで十二月二十五日、維新戦争の決定的運命の日、即ち鹿児島藩邸焼打ちの黒煙のあがるのを見ながら、かつて新婚時代を過ごした新

錢座の地に新塾舎を求めたのであった。従って鉄砲洲の図書部屋を充実させようと紐育のアプレトン書林から買ってきた図書は、鉄砲洲時代には間に合わなかった。

それらの図書の内容は「経済、修身、物理、化学、リーダー、地理、歴史の類一通り備わり、ウエブスター大字典の如きも数十部もあった」と永田健助は語っている。永田は初め幕府の開成所で学んだ。開成所の「書館には随分多くの書籍が備えてあったが、最も多いのは文典であり、次いで物理書であった。政治、哲学、経済、修身などの書物は碌々見られなかった。」と開成所と福沢の買った図書との比較をしている。そしてこの時は一種の書籍を二十部三十部づつ揃えて買って来たから、教員・塾生すべてが図書室備付の原書を手にし、これまでのような筆写の労力が省かれ、辞書を使って自由に勉強することが出来るのであった。それは洋学書生にとって劃期的な夢のような事柄であって、次の新錢座時代の塾舎で実行されたのである。

二 新錢座から三田へ

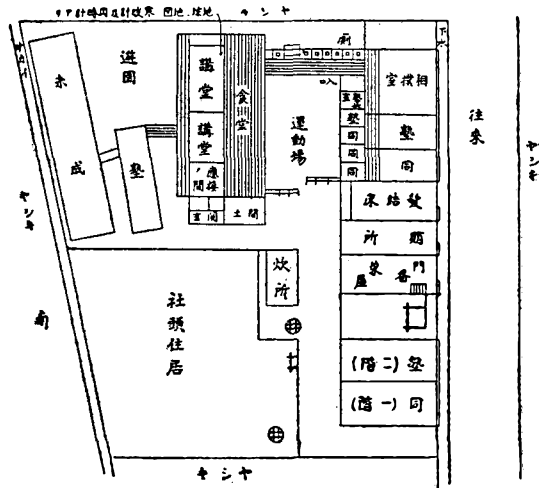
新錢座の塾は慶應四年四月に発足した。同時に慶應義塾と名付けて、開塾宣言の文「慶應義塾之記」を発表した。日本における洋学の伝統を記述し、この塾こそ洋学の正統を踏むものだと言明した。事実この時にあたって、江戸中の洋学塾は殆んど姿を消した。徳川慶喜は水戸へ去り、朝廷の軍隊が江戸を占拠してはいたが、徳川家の処分はまだきまっていなかったから、幕府公立の洋学研究の開成所はまだ存続してはいたけれど、建物はあっても学問の府たるにふさわしい存在ではなくなっていた。幕府という本家がそのようであったから、幕府に仕官しながら塾を持っている

た江戸の洋学私塾は今や塾どころではない、明日の吾身を心配せねばならなかった。そこえゆくと福沢は幕末以来、著述からの収入もあり、又幕府の因循姑息にも愛想がつきていたから、独立して教育に専心しえた。幕府という束縛も今はなく、新政府も定まらない。ここで初めて福沢は海外でみた学校の制度を採りいれることが出来たのである。「此学（英学）を世に拡めんには、学校の規律を彼に取り、生徒を教導するを先務とす。仍て吾党の士相与に謀て、私に彼の共立学校の制に倣い一小区の学舎を設け、これを創立の年号に取て仮に慶應義塾と名付く」そして革新的な試みを実行した。ここではそれらを詳細に語る余裕を持たない。前年将来した図書が如何に活用されたかを物語らねばならない。

先づこれらの図書は塾のどこに置かれてあったか。塾舎の平面図は幸なことに印刷された「慶應義塾之記」に附載され、その「義塾之記」は明治元年から二年にかけて三種類刊行されている。初めの二種は建物に変化はないが、部屋の名に相違が見られ、後のには部屋の変更とともに二棟の建物が増設されている。しかし図面には図書の置き場所が示されていないので、この時代の塾生の口を借りて探って見るより外に仕様がなない。

福沢が買って来た英書の豊富さに驚いた前節の永田健助は明治元年十一月に入塾し、後年の回想談によると部屋の配置などの記憶は正確である。門長屋を入れて突当りに福沢の居宅があり、それを右に折れた建物には玄関の六畳ばかりの座敷が応接間となつて、在塾生の姓名を記した木札が壁にさがっていた。玄関の続きに十畳か十二畳かの講堂が二つあつて、そのうしろにはそれと同じ位の大きさの部屋は板の間で食卓が並べてあつた。門長屋は寄宿舎にあてられ、むさくるしい室が大小六七間あつた。それはまるで元年版の平面図を見るが如くであるが、図書の置き場所は語

られてない。永田より少し前、五月に入塾した後藤牧太によると「ウエブスターの字書が講堂に置かれたるを記憶す。ウエブスターの字書の外、地球儀置かれたり、学生戯れて之れを転がすを以て、先生怒って引込まされたことあり、後に薩摩辞書出来たり。其頃は日本語のものは余り用いず、ウエブスターの大中字書を用いたり」とあって、講堂に辞書があったとはあるが、どの講堂だか位置がわからない。ところがその講堂は永田のいう玄関から入って一番奥にある板の間で食卓が並べられてある部屋のことらしい。それは明治二年九月入塾した須田辰次郎の回想に「奥の方の八畳には正面に世界の地図が掛けて居て其前にテーブルが一脚、其上に地球儀があり、それから極く旧式の水銀のはいった小さなコップ中に硝子の棒を立てたバロメーターが一つ、寒暖計が一つ、小さな柱時計が一つ」あったという。この時代にはその講堂は純然たる教室に変っていて、図書は新設された建物の広い部屋（二十畳敷位）に移されていた。「教授の用具としてはどんなものがあったか」と、広い室には大きな空の本箱が二つある。なぜ空であるかというと、書物が少いの借り手が多かった為に、本箱は何時も空になって居ったの



新銭座塾舎平面図

慶應義塾百年史に掲載された明治1年版と2年版の中間に発行されたものの平面図で、奥の講堂に什器の説明がある。

でございます」これで図書室などという名前はまだなかったが、図書のある部屋はわかった。新銭座の塾の出来たての頃は玄関のつきあたりの講堂が使われ、明治二年増築ができた後は、増築の方の室に移され、学生はそこで図書をじかに手にし、借り出してくることも出来たのである。教科書を引写して勉強する苦しみから逃れた教科書貸与制が行われたのである。

慶應三年福沢がアメリカから図書を買って帰ったときは、在塾生の数に見合った程度の量を備えていたのであろうが、維新の兵乱も納まる明治二年になると、新政府の外交も親善政策にかわったので、洋学、殊に英学修業の熱意は高まった。全国から学生があつまって、新銭座の塾では収容しきれない程になり、奥平藩上屋敷の長屋を借り、三年には麻布の竜源寺、芝山の広度院などの寺院を分塾にし、さらには旧幕時代の名門校だった江川屋敷の長屋をも借りて、「外塾」と呼んで使用した。かような有様であったから、須田の回想にあるように、本箱はいつも空だったわけである。だからでもあるまいが、学校側もなるべく初学者には教科書を買わせる算段をした。明治二年八月に印刷された「慶應義塾新議」に

「一 洋書の価近来誠に下直なり。且初学には書類の入用も少く大略左の如し。

理学初歩　価一分一朱。義塾読本文典　価一分。和英辞書　価三兩二歩。地理書、窮理書、歴史一部に付二兩より四兩まで。

右にて初学より一年半の間は不自由なし。

此外に価八、九兩ばかりの英辞書一部を所持すれば最もよし」

とある。このうち理学初歩や義塾読本文典、和英辞書などは恐らく翻刻もののことで、地理書、窮理書、歴史など一部につき二両より四両とあるのが、原書のことであろう。しかし価格が下がったとはいうものの、激増する洋学生需要には追いつかない。須田の懐旧談をもう少し拾う。「明治五、六年頃迄は東京市中、原書の本屋僅に二三軒、横浜に一軒あるのみにして、即ち日本橋釘店の丸善、向両国の島屋、築地の某外人店、横浜にケルン等是れあり。其店も殆ど見本として一種一、二冊あるのみ。同一種類のものが、五冊十冊と揃いたるものは、字書かパーレーの万国史、コロネルの地理書位の外、皆無というも過言に非らず」といった状態であったから、教科書借用に学生が殺到したのも無理からぬことであつたらう。

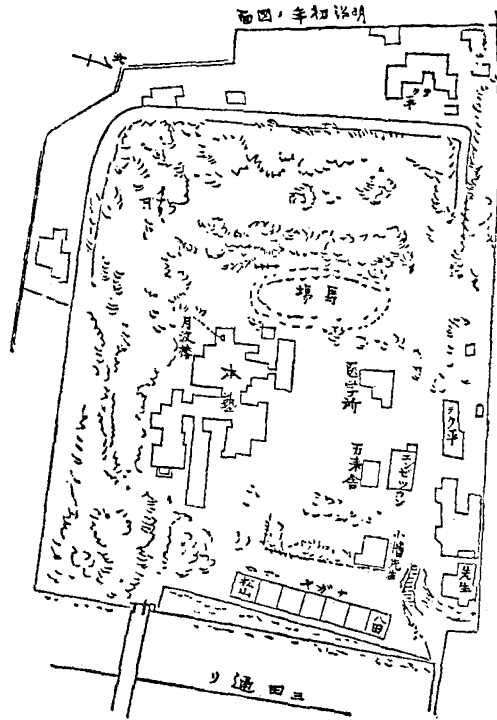
この教科書貸与は学生が少い頃は恐らく無料であつたらう。しかし明治三年頃になると貸出は有料になったらしい。明治三年十一月入塾の奥羽庄内の学生栗本東明は克明な日記をつけていて、義塾にいる間の本の貸借を記しているから参考になる。栗本は慶應三年に江戸へ出て伊東玄朴塾で蘭学を学び、側ら下谷辺の旗本の次男から「英吉利文典」の手ほどきをうけた。維新戦争で帰国したときも、幕府の英学者時田某が脱走して来たので、勉強を続けることが出来、戦後、もっと本格的に英語を学ぶために再上京し、慶應義塾に入學した。栗本は既に英語の初歩の段階は過ぎていたから、入学の翌日地理の原書一部を借り、素読に出席し、十時から十二時までの授業時間に地理書一枚半ずつんだと記されている。そしてその月の晦日に地理書借用代を二匁、錢に直して三百五十文、塾に納めたという。地理書は続いて借り、更らに地図を追加して借れた。その借用料は翌明治四年二月一日に、十二月、一月の二ヶ月分として七匁、晦日には二月分として一朱を納めた。こうしてウエブストルの「大辞書」、クワッケンボスの「小合衆国

史」、パルレーの「万国史」、グードリッチの「英国史」など次々に借り、明治五年四月医師を志して大学東校に去るまで続いた。その間、自分で買ったのは僅か二冊、それも英和辞書とノツタルの「スタンダルト字典」だった。その外に友達から文典、物氏小辞書とラルトネル「窮理書」を借りたことがあるだけで、如何に学校の図書が有効に使われていたかがわからう。

しかしこの反対の学生もある。塾の本を全く借りないで自弁で買い、しかも使わなくなると売却って、あまり損もしないで学生時代を過ぎた男のこともつけ加えて置こう。少し栗本より後になるが、七年十月入塾の沼津出の岡本経朝という学生である。その手控によると初めは丸善などから新本を買ったが、後には古本を使った。日蔭町の十字屋梅吉という店から買ったり売ったりしている。また義塾所蔵の図書も古くなると学生に払下げになる。岡本はそれを買った。明治九年にミルの「経済書」を一円五十銭で、同じくミルの「代議政体論」を六十二銭五厘で、スペンセルの「交際論」を一円四十五銭で買った。そしてスペンセルは後に十字屋に一円十銭で売った。購入した洋書で高価なものはバックルの「文明史」を丸善で五円、これを買ったときは四円八十八銭というからちゃっかりしたものである。岡本は号を昆石といい、後に著述を多く残した雑学者である。こんな要領のいい学生は当時としては例外と見て良いだろう。

さて、栗本の修業日誌は新錢座から三田へ移転した期間に涉っている。移転は明治四年一月頃から始めて、三月十六日に終った。三田は島原藩邸のあった広壮な地域で、これまで新錢座を中心として奥平屋敷や江川長屋や、その他寺院などに分散していた宿舍を一つに統合できた。在学生三百二十三名、都下における最大の私塾になった。

慶應義塾が三田に移った頃のこのあたりは慶應三年の薩摩屋敷焼討の跡がそのまま残っていて、丘の下は一面の荒野であり、飲食店としては三田二丁目に一軒、赤羽橋と田町辺にそれぞれ蕎麦屋が一軒あるのみだった。「芝山内には剽盗白昼に出没し、俗に稲荷山と称する義塾西南方の森中には時々狐の鳴声を聞くを得たりし」（慶應義塾便覧明治三六）という程で、島原屋敷も荒れていた。そうした旧大名屋敷をそのまま使って学校を初めた。屋敷の一隅に「月波楼」と呼ぶ三層の建物があった。丘の上にあつて、旧幕時代には珍らしい三階の建物であつたから名物とされて、天保年間に出た「江戸名所図絵」にも記されている。「松平主殿侯別荘の看楼ものみの号なり。此地の眺望、実に洞庭の風景を縮たるが如く、岳陽の大観を模うつすに似たり。依て城南の勝地とす」また、明治六年五月慶應義塾を訪れた福山の藩儒江木鰐水も「塾本、島原公邸、在三田、地勢高爽、前臨品川海、砲台在目前、右望品川後之山、左望江戸諸勝、皇居亦左近、（中略）而与諭吉氏登楼並講堂之楼、皆勝景、眺望雄豁美麗」と



三田の『新塾舎』

慶應義塾五十年史掲載のもの。月波楼の位置がわかる。

嗟嘆している。島原藩主はこの三階の部屋で美女を侍らせ、品海に映える月を賞したのであろう。しかし義塾がここへ移ったころは、風光は昔と同じく良かったが、建物は古びていた。福沢一郎の回想によると「然も家が曲って居りまして、突つかい棒がしてある。其丸太に子供が跨って下に滑り降りたりして遊んだものでございます」というような有様であったが、ここに貸与される図書の本棚を置いた。講堂の一部ではなく、兎も角も「月波楼」と名のつく建物に図書が置かれたのである。図書が置かれた最初の名のある部屋「月波楼」はその後、古びて壊されたが、ここを利用した学生達の思い出の名称として永く回顧された。そこで創立五十年を記念して建てられた現在の赤煉瓦の図書館の最も高い八角塔の最上層に「月波楼」の名が復活され、塾生時代その名の部屋で勉強した大義毅の筆になる「月波楼」の横額が、第二次大戦の時まで掲げられてあった。

慶應義塾も三田に移って規模も大きくなるとそこに詳しい規則ができる。その中に図書貸出に関する項目もでき、そして時に応じて改訂され、幾変更を重ねることになるが、そうした堅苦しいことは次節に譲って、ここでは初めて文書に現われる書籍掛を紹介しよう。三田へ義塾が移ったころ、塾内取締りのために作られた「入塾の人に告る文」なるものがあって、中に塾内の人事が記されている。

「一、教授に関りたる事は、芦野卷蔵氏、取扱うなり

一、会計、営繕、及借用書籍の事は渡部久馬八氏、杉浦礼吉氏、取扱うなり

一、前二条の事の外、寮中の事は都て名児耶氏に告げ聞合すべし」

ここに初めて図書を直接扱う人の名が出てきた。会計及び営繕兼務の人、渡部久馬八と杉浦礼吉である。渡部は慶

應四年一月、幕府崩壊の直前に福沢塾に入門した越後長岡の若侍、その時二十二歳であったが、長岡藩牧野家が官軍に抵抗することになったので、すぐ国へ帰って戦闘に参加し、敗戦後、再び入塾した時は鉄砲疵のために一眼はみにくく潰れていた。後年、伊藤博文の秘書になった小松緑の回想記に、明治十一年十一月に義塾に入學したときの渡部の風貌がしるされている。当時「日本座敷に塾監局があった。其処には英学校の役員としては相応ふさわしくない、何方かと言えば人相の悪い、頭の毛も髭ものびるに任せて、眼は片方潰れ、黒木綿紋付の着物に兵児帯をだらしなく締めた男が居った。それが塾監の渡部久馬八という人であった」とあり、又「どこから見ても壮士の頭目か山賊の帳本、学校よりも山寨にでも立籠りそうな人体である」と別の文章では述べている。戦場の経験もあるので度胸は良く、荒っぽかった明治初期の学生を扱うのには格好な人物だったようだ。明治三年、増上寺山内の分塾広度院の監督は稲垣銀治と渡部の二人であったが、ここで武勇伝を実演した。この分塾に三河の人で莊田健三という男がいて、酒癖が悪く、酔えば喧嘩を吹きかける厄介者であった。「梅雨のしよぼしよぼ降る或る日の午時過ひるに、本堂の方が騒がしいから駈け付けて見ると、此の莊田が泥酔し、本堂の真中で大刀を振り翳して、寄らば斬らんと身構えて居る。此時莊田の斬り込む大刀先を受けとめたのは渡部久馬八」であったという。渡部はその後も永く執事をつとめ、明治十四年から十六年までは理事委員となるなど、義塾の行政部門の重要な役職にもついた。従って借用書籍などの瑣末な事務は、もう一人の杉浦礼吉の役目であったかも知れない。杉浦は入門帳にも名が見えないので詳細はわからない。渡部は書籍掛とはいっても大調べなどで、他の執事を指揮して蔵書調べをするなどの方が似合っている人のように思える。なお、渡部は後、宮城県や北海道、朝鮮などで農業を営み、大正三年一月東京で歿した。一族には義塾出身者が多く、台湾

製糖の楨哲には伯父になり、登山家の楨有恒、防衛大学初代学長になった楨智雄などには大伯父にあたる人であった。

三　「書籍出納の規則」

話は慶應三年に戻る。福沢の第二回の渡米は図書を多く買ってこようとして出かけたが、使節主席とのトラブルで送られて来た図書の荷解きが遅れたことは前述した。このトラブルは帰国の時ばかりでなく、旅行中ずっと続いた根深いもので、ニューヨークに着いて為替金引替えに手間どったことに初り、船中福沢のすすめで雇った外人小使に逃亡されたことなど次々に不和の種が起った。福沢が学校へ見学に行ったり、教科書の購入にせわしげにするのを小野は不快がり、出発前の勘定奉行方御国益掛の役目を丸出しにして、軍艦購入の余剰金を投じて図書を購入し、日本で売って利益をあげようと計画した。英書の不足は幕府内部の開成所でも明らかなことであり、又同行の海軍士官が必要から購入を求めた書籍器械類の調達さえ拒んでの上のことであつたので、小野のこの行為は福沢を不快この上もないものとした。帰国のとき品川まで出迎えた塾生松山棟庵は「頭髮は蓬々として鬚も長く延び、其の容貌のやつれ加減は、予て先生を好男子と思っていた我々の眼には丸で別人と見えるほどであつた」と感想を述べている。余程心労が多かつたとみえる。しかしこうした苦勞も塾生の一人々々が洋書を手にして、喜びあつて勉学する姿を見ると、忘れ去るものであつたろう。長与専斎が「松香私志」で「其頃塾（緒方塾）中の雑談に字書を坐右に控え、原本にて書を読むことを得ば、天下の愉快ならんといひ合えり」その天下の愉快が福沢の才覚によって実現したのである。

購入して来た英書が使用できるようになった慶應四年は戊辰の戦乱のため、各藩は若侍の帰国を命じたから塾生の

数は極度に減じて、一番少いときは十八名になったと言われる。そうした学生の小人数の場合は規則もいらな。ところが人数が増えるとうはいかない。殊に在塾生ばかりの頃は扱いやすいが、通学生も来るようになると事は面倒である。三田に移って文部省にも私学明細表を提出する程の学校になると、もう規則なしではいられない。「慶應義塾社中之約束」は明治四年に初めて作られ、塾内万般に渉る詳細な規則であるが、その中に書籍出納の規則も盛り込まれる。義塾には塾監局、会計局、童子局及び教授方（今日の教務）の四職掌がある。塾監局の職務とする処は、入社、入塾、塾内、通学生、門の出入、応対掃除、書籍出納の七項目の規則に分れる。そしてその書籍出納の規則がまた九ヶ条ある。即ち

「第一条 新に書籍を調れば、これを蔵書目録に書加う可し

第二条 執事相談の上、不用の蔵書を売払うときは、古本売却の印を押す可し

第三条 通学の生徒又は教授方にても、外宿する者へは、会説、講義の書に非さればこれを貸さず。内塾生には辞書其外対説の書を貸すと雖ども、塾の教授に用る品及塾監局附属の品を貸さず

第四条 書籍出納の日は其時に従い塾監局より布告すべし

第五条 毎月二十六日は書籍を貸さず、此日は朝第八時より第十二時までの間、塾監局の執事、内塾生の各席に至り、其借用の書を改るが故に、此日は朝より改済みまで、塾生の外出を禁ず、若し要用ある者は隣席又は同部屋の人に托して書籍の改を受く可し。定の修覆料は月俸と共に会計局え納む可し。此規則に背く者は次で書籍の借用を許さず

第六条 通学生は毎月廿七日朝、第八時より第十二時までの間、借用の書を塾監局へ持来りて改を受け、修覆料は月金と共に会計局へ納む可し。此規則に背て借用の書を持参せざる者へは次の借用を許さず

三 「書籍出納の規則」

第一章 ツーフ部屋の流れ

二〇

第七条 一ヶ年兩三度、内外社中借用の書を尽く集て蔵書目録と引合ることあり。之を書籍の大調と名づく。此時は塾監局の布告に従い塾中の執事残らず出席す可きなり

第八条 書籍修覆料として借用せる社中より金を納めしむる割合、左の如し

一銀九匁 大ウエブストル之類

一銀六匁 中ウエブストル之類

一銀四匁五分 テイロル万国史之類

一銀三匁 クワッケンボス究理書之類

一銀二匁 ウキスドン及び小合衆国史之類

一銀一匁 小修身論及び第一リードル第二リードル之類

第九条 借用の書籍を焼き、又はこれに種子油を掛けし者は、其時の市価に従い代金を償はしむ可し。」

この煩瑣な規則は義塾が拡大されたからといって、急に出来たものではなく、新錢座時代の経験の積み重ねが、この文章になったのであらう。規則を見ると蔵書は絶えず、購入補充され、蔵書目録があつた。不用になった図書は執事が相談して払下げた。塾内に寄宿せざる者は学生、教員に限らず、会読・講義に関する書籍以外は貸出さない。内塾生のみ辞書や対読の本を貸す、但しこれは翌五年改正されて厳しくなつた。それによれば通学生へは定まれる読本の外は貸出されないことになり、別に「第五等生以上、稽古の書物大概は之を貸すべしと雖、等外生の読本は之を貸さず」が加えられる。当時の学生は学力によって等級が定められていた。第一等から四等までは大体教授方であり、五等は優等生と見るべきで、以下十二等まで別れており、等外生は初心者といつてよからう。従つて上級の学生には

稽古用の図書大概は貸すが、初心者用のものまでは貸出させないと解すべきであろう。次で書籍貸与の日は明治四年定めによると一定しなかった。塾監局員の仕事の都合によって定められたようで、それでは利用者が不便であった。従って翌五年には改正されて「書籍出入の日は毎金曜日と相定む」となった。第五条は毎月二十六日は執事が寄宿生の部屋を点検して借用書調査をするから午前中の外出は差しとめる。修覆料と称した貸出代金は月謝と一緒に納めるよう指示した。通学生はその翌日、借用書を必ず塾監局に持参して改めをうけねばならぬというのが、第六条である。翌五年のには通学生の借用書調べの方が先の第三金曜に行われ、寄宿生は第三土曜に行われることに変わり、修覆料は月謝とは別に、改めの日に銘々が支払うよう改正された。第七条は年に兩三度、「大調」という行事が行われること、第八条は修覆料金が図書によって違いがあることを示した。五年版では一々細かく示さないで「修覆料の割合は時々表を以て示すべし」と改められた。第九条は書籍の汚損、紛失に対する弁償規定である。

総じて規則は細目に渡って中々に厳しい。洋書が貴重であったからに外ならない。修覆料は会計局が集め、入用書の新規購入や破損書の修理代に使われた。これは会計局の職務の中に規定されている。「社中之規則」の最終頁には学生の一ヶ月の費用の標準が計算され、父兄の注意を喚起している。「衣服を新に造る可らず、書籍を買う可らず、一ヶ月七兩づつ、一ケ年八十四兩なり、これを学費の最も少きものとす。時々点心の菓子を買ひ、或は滋養の品を食う等のことあれば一ケ年百兩より少なかる可らず。百兩の金あれば夏の単物、冬の襦袢一枚を調るにも差支なかる可し。但し一ヶ月十兩以上の金を費す者は必ず奢侈を為す者なり」書籍を買わないで塾の本ばかりを利用しての費用は「金三朱乃至一分」とある。前節に参照した栗本東明は大体この標準にかかった学生であったことがわかる。

この規則は年々簡略化されて、明治三十年代まで続いた。どう改訂されたかを示す前に、一度この制度を大改革したことがあったことを記そう。それは明治六年に義塾がカロザスとグードマンという二人の米国人を雇ったことに初まる。外国教師に語学を学んで会話や英作文に巧みになるを正則と呼び、日本人に訳解を学ぶを変則と言ったのは大々南校が明治三年頃から称えていたが、当時の外人教師雇傭の給料の高さは、日本人に比べて格段の違いであったから、私塾では到底実行出来ることではなかった。ところが幸いなことに明治五年旧松尾藩主太田資美の寄附があったて、塾でも外人二人を雇い、正則科と変則科の二科を設けることが出来た。その時のカロザスの月給は百二十五円で、グードマンは六十円であった。期間は五年六月から六年七月まで一年の在任であったが、カロザスは義塾から去った後も築地で学校を経営しただけあって教育には関心を持っていた。カロザスは米国オハイオ生れで、シカゴ大学を卒業し、明治二年アメリカ長老派教会の宣教師として来日、布教のかたわら塾を開いていた。明治六年の「社中之約束」はその最後のそれと大いに異なる。恐らくカロザスの意見が反影してのことであろう。学生に対する「書籍出納の規則」などは最早、そこにはない。書籍に関してあるものは塾内の誰れが、何を扱うかの定めである。書籍を扱うものは執事である。執事のうち書籍に関係ある項目を拾うと

〔○校務掛〕

- 一 課業の書に注意し宜きに從て之を取捨す
- 一 書館を預る
- 一 「カタログ」並に勤情表を組立つ

一 課業の書を買入並に売渡す事を掌る。但し売渡しの節は会計掛一員之を輔くべし

○諸務掛

一 貸本を預り出納を取扱う

○会計掛

一 書籍売渡の節は校務掛を輔くべし」

とあるだけである。この「社中之約束」は明治七年に再び改訂され、五年の時のような煩細なものではなくなるが、内容はそれに近いものになる。たった一年間実行された大改訂だったことは太田資美の寄附も打切られて、雇傭継続が出来なかったことに原由する。カロザスは義塾の中に米国のハイスクールの規則を盛り込もうとしたのであるが、そうした教授法が当時の日本の実情にまだ早すぎたこともあるだろう。彼が去るとまた旧に戻ったのは、まだ英語の発音の正確を尊び、文法に拘束されるような地道な勉強より、書籍の内容を早く理解し、英米諸国に追いつけ、追い越せの学問の仕方はまだ魅力があった。新銭座から三田にかけて義塾に学んだ匿名の人の回想に「今日英書を学ぶ人の様子を見れば、横浜神戸辺で西洋人を相手にする車夫や馬丁になるため学ぶのか、又はアメリカへ稼に出掛け土方や百姓をするために学ぶようである。故に発音や文法は中々正則的だ。我々の時代は之に反して、頗る変則的で発音や文法や字句などに頓着せぬ。其の代りに大部の原書の要旨を早く吞み込み、泰西文明の心髄を覗い、政治経済の原理に通曉して、大政治家大経世家と為り以て大に天下を経綸するが、我々のミッションであると言うような調子で、大部の書籍をばどしどし読んだのである。」

さて、明治七年の「社中之約束」の中の書籍の項は非常に簡略化され、学生に関係ある箇所だけが残された感があ

る。

「書籍出納の事

- 一 等内の生徒へは課業の書籍大概は之を貸すと雖も等外生の読本は之を貸さず
- 一 生徒へは課業の書に非ざれば之を貸さず、但し内塾生へは原書の字引を貸すことあるべし
- 一 毎月第三土曜日には午時より執事内塾生の各席に至り、其借用の書を改むるが故に此日は午時より改済迄塾生の外出を禁ず、若し要用あるときは隣席又は同部屋の人に托して書籍の改を受くべし、此規則に背く者は次て書籍の借用を許さず
- 一 通学生は毎月第三金曜日朝第九時より午後第二時迄の間に借用の書を塾監局へ持来りて改を受くべし、此規則に背て借用の書を持参せざる者へは次の借用を許さず

- 一 一ケ年に兩三度内外社中借用の書を尽く集て蔵書の目録と引合せ大調を為すべし
- 一 借用の書籍を焼き又はこれに種子油をかけし者は其時の市価に従い代金を償はしむべし」

明治四年では九条で、五年に十条にふえたが、七年には僅か六項目に縮められた。そして最も大きな変化は貸出図書の修覆料に少しも触れていないことである。思うにカロザスの改革に図書の無料帯出が含まれていたものに相違ない。この規定は年代のすすむにつれて更に簡略化されるが、明治十七年の改正には次の一項目が加わる。

- 「一 病氣或は其他の事故にて一時休業することあらば一旦書籍を返納すべし、若し返納せざるときは仮令一ヶ月全欠席たり共、定額の授教料塾費を納めしむ」

つまり授業料の中に図書の修覆料が含まれるとされていたのである。明治六年正則変則の二科が設立されたとき、受教料の値上げがあった。そして「受教料とは教を受けるの費のみを云うに非ず、凡其五分の一は他の校費に充つるな

り」とあって、修覆料は他の校費に含まれたものと見える。そしてそれが七年以降も引継がれた。圖書の無料貸出は六年から十七年まで続いたが、十八年九月には改正されて再び有料になる。

「一 課業書を借用するものは其損料として毎月金十銭を納むべし、又他の書籍を借用するものは其大小部数に従い、相当の損料を納むべし」

図書貸出の有料か無料かの外の規則の改訂は小さな事柄である。例えば九年の改訂には執事が寄宿舎を廻って貸出書を調べることはやめて、内塾生も通学生並みに講堂に本を持参して照合をうけるようにするとか、それが十八年には月一回でなく、不時に行われるとかである。又弁償の項が明治九年には「借用の書籍を焼き、又は種子油をかけしもの」が、単に「借用の書籍を損じたるもの」に変わったのは、行燈の使用がなくなったことを示して興味深い。こうして明治三十一年まで続けられる。

最後に圖書の新規購入のことに触れる。廃本になって売払われる図書があると同時に、新しい本が補充される。

「課業の書に注意し宜しきに従って之を取捨す」と簡単な明治六年の規則にも、最も重要な仕事としてその最初に掲げられている。では、その図書選択者は一体誰だったのか。「慶應義塾五十年史」によれば「明治二十三年大学部設置までは、買入書籍選択に付ては門野幾之進」とある。門野は明治二年四月入塾した烏羽藩貢進生である。義塾を出て共償義塾や高知の共立社の教頭を経て、明治十二年頃義塾に帰り、教員筆頭の位置を占め、明治十六年には教頭となり、二十五年十一月義塾を去って実業男に入るまでその位置にいた。教頭というのは要するに明治六年の「社中之約束」の教員及び校務掛の長に当る。圖書の選択購入に「読みの門野」と仇名された程、読書力に秀でていた門野が

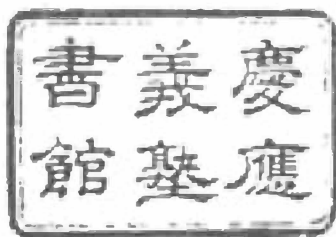
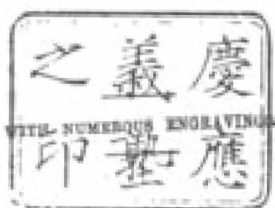
担当していたのは当然のことといえよう。

四 教科書貸与制の存続

多数の図書を所蔵し、それを学生に貸与することになると、他人の図書と区別するために蔵書印が押されることになる。今迄のべられてきた図書にはすべて蔵書印がある。塾生達の勉学のために大量購入して米国から持ち帰った図書には「福沢氏図書記」の朱印が先づ捺印された。これが慶應三年末から四年の春にかけてであろう。そして有名な上野の彰義隊の戦争で砲煙をみながら講義を続けたとき、福沢やその聴講生が手にしていたウエーランドの「経済書」には、すべてこの「福沢氏図書記」の印が押されてあったろう。「慶應義塾」と学校の名称がきまったのが、慶應四年四月頃で、この頃から学生への貸

与本には「慶應義塾之印」なる蔵書

印が押され、完了したのは明治二年であったという。其後三田に移って「慶應義塾書館」という印がおされた。それは貸与図書の数が多くなって、講堂の一隅にあるというのではなく「月波楼」という堂々たる建物に



初期の蔵書印

置かれるようになったので、管理の上から名前をつけられたもので、或はカロザスの意見かも知れない。明治六年の「社中之約束」に校務掛が「書館を預る」とあるのが、規則に現われる書館の文字の初めてであるからである。

「慶應義塾書館」の蔵書印は其後永く使用された。カロザスの来校によって正則科と変則科が起り、それも瞬時にして止み、正科・別科の制が残った。年少にして就学し、五年の学期を踏むものを正科とし、十八歳以上の書生で速成に英書を理解せんとする者のために別科（科外生）の制度が設けられた。これが更らにこまかく正科に本科・予科の別を設け、別科にも四年と年限を区切って卒業としたりした。そしてそれを一括して普通科と称した。この間、書館も島原屋敷の「月波楼」から煉瓦講堂に移された。明治二十年八月竣工した福沢のいとこの子で、義塾を経て工部大学校第二回卒業の藤本寿吉が設計し建てた煉瓦講堂は「建坪は百三十九坪二合五勺にして、上下合せて間数十六、三十坪の大広間あり、事務室、書籍館は孰れも十二坪、応接の間は二箇所にて各々六坪なり、其教場に充つるものは九坪乃至十五坪のもの十一間にして、各級の生徒が時刻を同うして席に着くも猶四五百人を容るるべし」（時事新報記載）とあって、十二坪の書籍館をその中に含んでいる。明治四年の三田移転から既に十数年を経て、活発な青少年の常時使用に、「月波楼」の老朽化は避けられなかったと思われるから、煉瓦講堂内が使用されたのであろうが、それが講堂内の何処にあったかは判明しない。「慶應義塾書館」の蔵書印は以上のような学事上の変革や建物の変化に一切かわりあいなく使用されつづけた。

この教科書貸与の書館は述べつづけて来たように蘭学塾のゾーフ部屋からの発展によるものであって、今日の大学図書館とは性格が異なる。それは慶應義塾が永く英学を中心とし、英語教育に重点を置いて、その間に専門知識を吸

収するという学校であつたからである。慶應義塾のような英学校は明治初年には日本全国に乱設された。そしてそれらは義塾の影響をうけることが多かつたから、教科書貸与制度も多くの学校で実施されたことであらう。現に政府経営の学校ですらそうであつた。東京大学の前身、大学南校と東校は、明治二年新政府が旧幕府の開成所の施設を引継いで成立した。そこには書籍局、典籍局と呼ぶ図書館があつた。以下、「東京帝国大学五十年史」に記載の記事を借りる。「当時外国書の舶載せらるるもの甚だ少きを以て民間に流布するもの少く、又翻訳書の出づるもの亦多からざりしを以て、参考書は勿論、教科書の如きも学校にて購入して必要に応じ生徒に貸与し、以て学修の便を図らざるべからざりき」は全く義塾のそれと同一である。図書掛は蔵書を管理し、併せて払下げ、貸出の事務を行うことを専らとしていたことも同じである。

しかしこうした貸与制は明治初年にして次々と廃められて行つた。福沢の跡に続いた多くの洋学校は十年代には殆んど姿を消す。政府の大学南校もやがて変質し、専門分野の研究と専門科目を授くる学校に変わってゆく。明治七年五月南校は東京開成学校に、東校は九年十二月に東京医学校となり、明治十年四月には東京大学法・理・文学部が成立する。そしてそこには図書閲覧室が出来「翻訳書ヲ初メ我国ノ正史及野史等ソノ正シキモノヲ選ミ、之ヲ準備シ生徒課業ノ余暇縦覧」せしむる設備をととのえ、「図書館」の名称を使った。十年代に新設される私立の学校も多くは専門学校として発足するようになる。後年、慶應と並び称された早稲田大学の前身、東京専門学校を例にとろう。明治十五年の開設広告によると

「一　本校は修業の速成を旨とし、政治経済学、法律学、理学及び英語を教授す。

一 政治経済、法律および理学の教授は、専ら邦語講義を以てし、学生をしてこれを修学せしむ

邦語による専門教育と英語の習得によって欧米の新義を知らんとしたのである。それは「学問の独立を旗印に、自主研學をいのちとして駒を進めることであり、従つてまた圖書第一主義が校是でもあった」（『早稲田大学八十年誌』）という。東京専門学校は政変によって政界から追われた大隈重信の建てたものであるから、経営の困難は義塾と同様である。その図書室も教室二階の八畳間に二個の書架を置いて出貸したという。しかし自学自修を立て前とした建学の方針は、図書館の建設には積極的であつて、二十二年には五十名を収容し得る閲覧室を作り、圖書の充実に学生が募金して援けるという風に、発展の基礎は早くから芽ばえていた。

これに反して慶應義塾は教科書貸与を主とする図書室を明治三十一年まで存続させた。それは教育内容と関連するものであり、又他方私学の貧しい財政にもよるものであつた。「文明東道に努めた」と自から称する福沢は外国の図書館の優秀さを充分認識していた。幕末、海外に三度渡航し近代図書館制度を見て、慶應二年の「西洋事情」に紹介している。「西洋事情」は当時世間に歓迎されて、その発行部数は偽版を合して二十万乃至二十五万部に達したといわれる。それ程、攘夷の国、日本でも海外諸国の優秀さは認められていた。医師の卓拔さは早くより証明済みであり、兵器の威力、航海術の巧みさは眼のあたり見せつけられていたが、「西洋事情」はそれらの背景を型造る政治組織や社会制度を、平易にわかり易い言葉で説明した。従つてその影響は目に見えるほど敏速であつた。幕末の頃既に病院が立てられ、貧院が目論まれた。これが明治以後の開国の世となると公然、先きを争つて実行された。その中に図書館もある。「西洋事情」には文庫乃至書庫と呼んで紹介している。

四 教科書貸与側の存続

「
文庫

一 西洋諸国の都府には文庫あり「ビブリオテーキ」と云う。日用の書籍図画等より古書珍書に至るまで、万国の書皆備り、衆人來りて随意に之を読むべし。但し毎日庫内にて読むのみにて家に持帰ることを許さず、竜動の文庫には書籍八十万巻あり、彼得堡^{魯西班}の文庫には九十万巻、巴里斯の文庫には百五十万巻あり。仏人云う、巴里斯文庫の書を一列に並るときは長さ七里なるべしと。○文庫は政府に属するものあり、國中一般に属するものあり、外国の書は之を買い、自国の書は國中にて新に出版する者より其書一部を文庫へ納めしむ」

この記述は歐羅巴諸国の官立図書館であつて、藏書数の膨大なことに驚き、又納本制度の実施を伝えている。こうした公共図書館の便利さは福沢に感銘をあたえた見え、他人にも推奨している。京都府参事榎村正直は福沢と親しくし、良くその意見を聞いた人であるが、福沢から「書籍縦覧結社」なるものの開設を勧誘され、明治五年わが国初めて図書館ともいふべき集書院が設立された。

ところが学校内の図書館については記事が少い。「西洋事情外編」に「大学校の内には書庫あり、博物館あり、又窮理学に用ゆる器材も備わりて、寒貧書生と雖ども自由に此物品を用いて志す所の学業を研究すべし」とあるだけで、学校内の書庫の大きさや、設備に関してはあまり注意を向けていない。「西洋事情」は文久三年の渡欧のときの見聞を主としたものであるが、この頃福沢は小なりとはいへ、江戸で洋学塾を営んでいたから、歐洲の大小の学校には努めて参観している。英国では「キングスコルレッジ」、和蘭では「レーデン大学」、独逸では「ベルリン大学」、露西亜でも体育学校、鉱山学校、医学校など見学しており、その他小学校にも立寄っている。慶應三年の二回目の渡米のときも「コロンビヤスクール」を参観している。では福沢は欧米の学校で何に注目して来たか。それは「西航手帳」な

どを見ると良くわかる。学課の課程、修業年限、教授や学生の数と学費など、主として学校経営の方面に関心が深かったようである。しかし学校施設は訪問の都度、詳しく見せられたので図書館なども見学し、その充実振りは充分承知のことと思われる。だが、それには莫大な金が必要なので、すぐには実現出来ず、永年の夢であった教科書の学生への貸与が先づ実行されたのであろう。慶應四年に英書が貸与されて勉強し得るということは学生に大きな喜びであると共に、日本の学界でも驚異とするところであった。そしてその模倣が行われ、それが亦、泡沫のように消え去った後も続けられ、明治三十一年に廃止になったという存続の永さにも、驚きがともなうであろう。

恩恵をこうむった学生は非常に多い。勿論、親が有福なものは自分で教科書を買えた。既述の岡本経朝のように買って損をあまりしなかった要領のよい学生もいたが、大部分は学校から借りた。明治十八年入学の柳莊太郎は「先生も生徒も同じ教科書を持って読むのです。そのころは御承知でしょうが、塾で本を借りる。私はバジョウのコンステイチュションを持って居った。しかし十中八九までは塾で本を借りて、そうして先生もそれを見てどんな難しい本でも輪講でしたネ」と語っており、少し遅れて入学した小林一三は明治二十一年二月十三日、山梨県から上京して三田の高台に立って初めて海を見た。そしてその翌日入学試験をうけて、予科四番の一に編入され、ローマ史、ウィルソン第三リードル、グエーキー地質学、ロビンソン実用算術書を借りた。但し、漢籍日本外史は自費であったという。後ち宝塚劇団をつくったこの小林と同クラスに岡嘉太郎（後ちの劇作家岡鬼太郎）がいた。二人ともその頃から芝居好きで、よく示し合せて出かけたが、ある日、授業が終るのを待ちかねて、早々に二人乗りの人力車で新富座に駆けつけたのはいいが、岡は教室の机に借用のリードルを置き忘れ、翌日教員室に呼ばれ、保証人を呼出すぞと大眼

玉を頂戴したという話が伝えられている。

明治二十三年五月予科三番の二に編入された林毅陸は休暇明けの九月十五日、教科書を借りに行ったら月謝が滞納しているので貸してくれない。「狼狽蒼ナラズ、直チニ高橋氏ニ委細ヲ申送り至急ノ送金ヲ請フ」九月二十九日には「午前会計局ヨリ呼バレ仕払催促ヲ受ク、是レ七月分ヲダモ未ダニ収メヲラザレバナリ、余無念万斛、殆ンド涙ント欲シ、又ア、金無キ程世ニツラキモノハナキ」云々と、後に塾長になった十七歳の少年林は日記で地団太を踏んでいる。

この頃の教科書貸与は学期初めの第一日に行われた。高石真五郎日記に「十一日終日微雨、今日ハ今学最初ノ日ナリト雖モ課業ハ授ケズ、只教科用書ヲ塾生ニ借スノミ、余ハ五等ノ一教科用書ナルフイシャー万国史第二、スイントン文法、トドホント小代数書、エベレット物理書四冊ヲ借ル」とある。これは明治二十八年一月の記事で、同年の九月十六日の項にも始業の日だから、例の様に書物を借り、時間表を写すにとどまると記してある。

ところが借りるのは有難いが、次のような弊害もあったことは、明治二十八年九月入学した板倉卓造が語っている。「上級に進むとともに教科書は漢文の外は諸科みな英語の原書で英米舶来のものばかりであった。それを生徒学生一人一人に図書館から貸してくれるのである。というとき常に沢山の貸本が用意されていなければならぬのであるが、当時の生徒数は私の一級にしても僅々二、三十人に過ぎない程度のものであったし、その本も上級生からの代々の下がり物であったから、実行困難ではなかったらしい。ところがその代々の下がり物を借用して見ると、大抵全ページの各行に仮名文字の訳語が書き入れてある。先生から訳読をあてられたときの当座当用には、あたかも大に便利である

ようだが、実は誤訳や感じがいの書き入れが頻出続出して、甚だしく後進生を惑わせたものであった」

この先輩から後輩へ、後輩からそのまた後輩へと何十名かの塾生の手に渡った教科書が現在でも、図書館に見本として保存されている。借用頻度の高い図書は製本を仕直され、背に見易いように日本字をつけたものもある。グールドリッチ米国史とか、ロヤル第六とか、スチウセント仏国史とか略されて書かれている。開いて見ると訳語ばかりでない、試験の愚痴やら悪戯がきが満載されて、使用の古さをまざまざと物語っている。米国大統領ポークの口絵に眼鏡がかけられ、ピンとはねた口髭が書かれた横に、山口大造先生の肖像と記され、普通部高等科山口教員の俵を今に伝えている。

多数の図書を収蔵し、それを学生に貸与利用せしめたことからいって、「書館」も図書館だといえる。しかし教科書が主であって教科課程と直接結びつきのうすい修養書や研究用参考図書がないことは、専門学校の図書館と決定的な相違である。それらの図書が全く無いというのは云いすぎで多少はあった。明治四年の規則にも「塾の教授に用る品、塾監局附属の品を貸さず」とあるように教授用の図書は多少あって、補充の努力もした。初年生の授業には今日上級生から教わったことを、明日下級生に教えるという緒方塾以来の幼稚さもまだ残っていたが、上級の教師になると訳解だけでは済まされない。矢野文雄の懐旧談に「教員たる地位は書生に教ゆるが為にも多少の研究を為さざるを得ざる外に、余暇に於ては自から諸般の書籍を研究するの便多きものたるを経験せり」こうしたことから教科書一辺倒ではなくなる。「慶應義塾五十年史」によれば明治六年以降に馬場辰猪、目賀田種太郎、金子堅太郎が外国から帰朝したとき持参した図書を譲受けたとある。これらは寄附されたのか、委託であったのか、わからない。現在の図書

館には一冊も見当らないから、委託かも知れない。斯様に教科書以外のものも増えたというものの、まだ不充分であつたことは矢野が明治六年に政体のことを調べようと思つて「義塾の文庫を調べしが、当時我塾の文庫は他の塾に比すれば多くの書籍を蔵すると云うて可なるべきに、なお且つ思う程の政治書」なく、止むを得ず五百頁程の米國憲法史一冊あるを見つけて研究したとある。しかしこの本を読んだお蔭で、立憲政治の神髓を知り、明治十四年の政變の原動力となつた大隈重信密奏の意見書は矢野が書いたといわれている。十年以降、福沢も本格的な図書館の必要を感じて、その設置に努力するようになる経緯は次節で述べる。